

Ⅱ これまでの長期研究推進計画の経過

(1) 第1次長期10か年研究推進計画 昭和45(1970)年度～昭和54(1979)年度

研究主題

「新時代を開発し、主体的・創造的に生きる子供の育成」

～へき地・複式学校の特色を生かし、

児童生徒一人一人を伸ばす学校・学級経営と学習指導のあり方を研究する～

「長期・課題別・共同研究」方式

組織的研究として発足した第1次長期10か年研究推進計画(以下「第1次長計」)の特徴は、「長期・課題別・共同研究」方式にある。

北海道では、単級や複式学級を有する学校が各地に広く分布しており、学校単独の研究ではなかなか成果の広がりが見られなかった。各学校が結束しての共同研究の必要性が痛感された。

昭和45(1970)年、道単連は、長期10か年研究推進計画を策定し、複式教育の方法論の確立と研究推進の定型化をめざした。複式教育に特有な課題が設定され、連盟所属の各学校が課題解決に向けてその実践に踏み切った。これはまさに複式教育史上画期的なことと言える。

長期研究

これまでの複式教育研究は、発表の場も少なく、個人的な研究・実践にとどまっていた。当然、研究資料も少なく、不備なものが多かった。また、学校差や地域差が大き過ぎ、行政的にも整備されておらず、組織的な研究・実践という面でも充分ではなかった。伝統的な学年差意識が教師間に固定化していたり、人事異動が停滞していたり等の理由で、研究に発展がなく、展望も開けなかった。

それらの悪条件が、現場教師や関係諸機関の努力で改善・整備されるようになり、授業実践を通して複式教育の理論を構築しようとする気運が生まれた。その結果として、研究に長期的な展望を持ち、組織的・系統的に課題を見つめ、実践・検証していくことの必要性が提唱されるようになった。

この長期研究では、10年間を第1期(研究期)、第2期(典型期)、第3期(検証期)に分け、全道各地で研究されていた貴重な実践を掘り起こし、それを集約・整理して全道に広め、研究意欲を盛り上げる時期として活動を進めた。

課題別研究

へき地・小規模・複式学級を有する学校(以下「へき地・複式・小規模学校」)における教育環境は、へき地教育振興法等により、著しく改善されてはきたが、未解決な問題もたくさん残されていた。そのため、道複連では独自の内容と方法による課題別研究に取り組むことになった。教科の本質を追究し、教師が指導力を高めていくことは重要なことではあるが、それだけでは複式学級における授業を改善していくことが難しいということから、複式教育特有の指導内容や指導方法についての研究を進めていくことにした。そして、課題を解決するために、「へき地性」「小規模性」「複式形態」の三特性を常に究明する姿勢をもつこと、子供の立場から学校教育をとらえ、複式教育の理念を確立していくことなどを明確に打ち出した。

課題別研究の方式を確立するために、研究領域を「学校・学級経営」と「学習指導」の2領域に分け、さらに、「学習指導」を「指導計画」と「指導方法・様式」に分けた、合計3分野の領域として研究・実践を進めることとし、側面からは、教科・道徳・特別活動から切り込むこととした。

共同研究

複式・小規模学校の点と点をつなぎ、線と線を結び、広く深い理論と実践を志向しなければ、複式教育の進展は望めないということに誰もが気づいていた。そこで、昭和45(1970)年を期して、

組織的に全道一つの研究主題をもち、共同して研究に取り組もうということになった。

昭和50（1975）年、道単連は、単級の学校がなくなったことから北海道複式教育研究連盟（以下、「道複連」）と名称変更し、同時に研究機関（研究推進委員会）を設置した。全道14地区から1～2名の代表に集まってもらい、道複連としての研究計画策定やその推進及び集約を行った。

研究の経過

第1期 昭和45（1970）年度～47（1972）年度

3期に分けたうちの第1期は研究期として、長期10か年研究推進計画の全体構想を立て、研究目標、研究仮説、研究内容、研究方法を明確にした。このことにより、次期の研究方法に見通しが持てるようになった。

昭和47（1972）年には、第21回全国へき地教育研究大会が上川管内の14分科会場で開催され、道外からの参加者1500名、道内800名の計2300名という空前の参加があった。教育行政の指導陣をはじめ全国のへき地教職員から絶大な賛辞を送られる大きな成果を収めたことが報告されている。（北海道教育史第2巻学校教育編による）

第2期 昭和48（1973）年度～50（1975）年度

第2期は典型期として、第1期における複式教育研究の原理的なものと基本的なものをおさえた研究・実践を進めていった。それらの実践検証の中から各地区における実践モデルが生まれてきた。

第3期 昭和51（1976）年度～54（1979）年度

第3期は検証期として、全道、全国で実践された典型を参考にして、各学校の実態を考慮して取り入れ、定型化を進めていった。定型とは、典型的な実践モデルを「いつでも」、「どこでも」、「だれでも」が地域や学校の実態に合わせて応用できるモデルのことである。

研究の成果

この10か年の研究の成果をつぎのようにまとめることができる。

- 閉ざされたへき地・複式教育から、開かれたへき地・複式教育への発想の転換が進んだ。
- 実践研究の科学的検証を通して、理論的にも整理され、へき地・複式教育の体系化が進められた。
- 研究目標、研究課題が明確になり、具体的な子ども像の共通化が図られることによって、典型的な実践モデルが数多く生まれた。
- 全道的に共同研究の組織確立と研究・実践の充実が図られた。
- 新しい経営理念の創造と研究・実践が進み、独自性のある活力に満ちた学校経営が行われるようになった。
- 学習指導法の現代化、最適化に挑む実践が各地で見られるようになり、その中から数多くの典型が生まれた。

（2）第2次長期5か年研究推進計画の経過 昭和55（1980）年度～59（1984）年度

研究主題

「たくましく実践力をもって、主体的・創造的に生きる人間性豊かな子供の育成」

～へき地・小規模・複式学校の特性を生かした学校・学級経営の近代化と

学習指導の最適化を目指して～

特徴的な課題

第1次長期10か年研究推進計画（以下、「第1次長計」）の精神と内容を発展的に受け継ぎ、第2次長期5か年研究推進計画（以下、「第2次長計」）を策定した。第2次長計では、価値概念が多様化し、生活が複雑化する今後の社会を見通して、研究期間を5か年とした。また、主題に迫るため

に、以下のような特徴的な課題を掲げた。

- 教育の今日的な課題から
 - ・児童生徒一人一人に目を向けること・基礎的な能力育成に配慮すること・豊かな人間性の育成を目指すこと
- 複式教育の研究と実践の視点から
 - ・へき地・小規模・複式学校の特性を生かすことを改めて確認し、なおその内容から深化を図るように努めること
- 地域的課題として
 - ・地域の自然に調和した教育を行うこと・郷土の文化に根ざした教育を行うこと

研究推進の留意点

さらに、研究推進の留意点として、以下の2点を強調した。

- 組織性の重視
第1次長計の結果、課題別・共同研究のための組織が定着し、高い評価を得た。今後なお、細部にわたる組織的活動を活発にし、創意に基づく取り組み方の典型を整理し、創造していく。
- 合理性の重視
第1次長計によって、これまで広がることのなかった道内各地の優れた研究・実践を集約し、へき地・小規模・複式学校の実践理論・方法として練り上げてきた。今後は、これまで以上に合理性を重視し、課題の解明・解決を図る。

研究の経過

第1期（研究の典型期） 昭和55（1980）年度～57（1982）年度

第1年次には、全道へき地複式教育研究大会を全国へき地教育研究大会に併せて後志管内で開催した。第2次長計では、第1次長計の成果を継承するとともに、新教育課程（昭和55年度学習指導要領改訂）の精神に基づき、広さ、深さ、新しさを持たせ、研究・実践を進めた。その結果、以下のような成果を見ることができた。

- ① へき地・小規模・複式学校の特性を生かし、一人一人に目を向けた教育が実践された。
- ② 複式形態の学習指導に着目し、基礎的、基本的内容の精選と指導計画や指導方法の様式化が進んだ。
- ③ 人間性豊かな子供の育成のための学校・学級経営や学習指導の発想の転換がなされた。
- ④ 授業実践による検証という共同研究体制が確立され、研究大会会場校を中心に、教師の高まりと児童生徒の変容が見られた。
- ⑤ 児童生徒一人一人を生かすとともに、集団化を図った指導計画が作成され、実践が累積された。

第2期（研究の定型期） 昭和58（1983）年度～59（1984）年度

第1期の典型期を受けて、この期間に生まれた理論的・実践的研究成果をさらに授業実践による検証を通して、各学校で活用できるような実践の定型化を目指した。その結果、以下のような成果を見ることができた。

- ① 共同研究体制が充実し、単発的な研究ではなく組織的計画的な研究が推進されるようになった。
- ② 教育課程3領域の関連性や系統性を考慮した特色ある取り組みがなされた。
- ③ 学校・学級経営と学習指導の一元的な取り上げの中で、授業実践による検証を通じた課題別研究方法が発展的に継承された。
- ④ 個に応じた指導から、集団化を図った実践の中で個を引き上げる指導がなされた。
- ⑤ 集合指導における分習・全習の研究で、児童生徒の「練り合い」や「深め合い」を追究した学習指導の深化・充実が図られた。

(3) 第3次長期5か年研究推進計画 昭和60(1985)年度～平成元(1989)年度

研究主題

「たくましい実践力をもって、主体的・創造的に生きる人間性豊かな子どもの育成」

～へき地・小規模・複式学校の特性を生かした学校・学級経営の近代化と

学習指導の最適化を目指して～

特徴的な課題

第1次長計・第2次長計の研究主題を発展的に受け継ぎ、新しい教育の動向やへき地・複式教育への新たな要請等を加えて第3次長期5か年研究推進計画(以下、「第3次長計」)を策定した。

第1次長計では、計画を研究期・典型期・検証期に区分し、研究内容を「学校・学級経営」と「学習指導」とに2大別し、さらに「学習指導」を「指導計画」と「指導方法・様式」に分け、2領域3分野による研究課題の解明を図ってきた。第2次長計でも、第1次長計の研究方式と内容を引き継ぎ、着実な研究・実践を重ねる中で、科学的・合理的な検証を通して研究成果を累積してきた。

第3次長計では、研究方式は、これまで通り2領域3分野による課題別研究方式を採用し、研究内容は、第2次長計の内容を尊重しながら、研究課題の解明解決に結びつく、より具体的な内容を取り上げている。

推進に当たっては、これまでに典型化された実践を更に確かなものにしていくことに重点を置き、実践研究の基盤を確立し、継承していくことを目指した。

また、第3次長計に、次のような特徴的課題をもたせた。

- ① 一人一人の児童生徒に、基礎的・基本的能力と豊かな人間性を身に付けさせ、激動する社会をたくましく生き抜く意志力と実践力を養う。
- ② へき地・小規模・複式学校の特性を十分に生かした学校・学級経営や教育活動に結びつけ、これをさらに充実・発展させる。
- ③ 児童生徒が、自分の生活している地域を正しく理解し、地域に対する愛情をもち、地域発展の担い手として成長できるように、地域の自然や文化・伝統、歴史等に目を向けさせ、地域の自然に調和し、地域の教育力を活用して、地域に根ざした教育活動を展開する。
- ④ へき地・小規模・複式学校の児童生徒のもつ課題としてあげられている言語能力、表現力、社会性、感受性、感動性などの弱さを解消する。

研究の経過

第1期(実践研究の検証期) 昭和60(1985)年度～62(1987)年度

第2次長計の総括に基づく研究内容、方法等の成果を確認し、第3次長計の研究領域、分野ごとの課題について、より確かな理論の確立と実践による検証をしていく時期としている。

第2期(実践研究の整理期) 昭和63(1988)年度～平成元(1989)年度

これまでの長計による研究成果を双書「複式教育の創造」につなげるよう研究の深化・統合を図りながら、複式教育の実践論、方法論として整理・集大成するとともに、第4次長計を策定していく時期としている。

研究課題と研究内容

学校・学級経営の現代化	
目標 「地域・父母とともに、子供一人一人を生かす経営の創造」	
課題 1 子供一人一人を生かす経営理念と教育計画を樹立する。	○子供一人一人を生かす経営理念を具体化する。 ○実態に応じ、一人一人を生かすための教育計画を創造し実践する。
課題 2 父母及び地域の人々とともに歩む教育活動を推進する。	○地域との連携を図り、住民と共に豊かな教育環境を設営し、充実した経営を進める。 ○市町村教育目標達成のための教育計画の策定と実践を進める。
課題 3 郷土の自然と調和し、文化や伝統を尊重した個性豊かな学校・学級経営を樹立する。	○へき地・複式学校の特性を生かした特別活動と道徳教育の創造的実践を進める。
課題 4 学校教育活動を充実し、近隣、地区の教育の協業化体制を確立する。	○集合指導、交流学习などにおける教育の協業化を進める。 ○学校規模別の学校・学級経営の評価活動を通し、その改善・充実を図る。
学習指導（指導計画）の最適化	
目標 「子供一人一人を生かすとともに、指導内容の精選を図った指導計画の創造」	
課題 1 自校の実態や小規模学校の特性を生かした指導計画を作成する。	○複式指導計画作成の基本方針を確立する。 ○授業を通し、小規模校における指導計画の評価・改善をする。
課題 2 教材の精選を進め、複式教育による学習の効率化と学力向上を目指した指導計画の作成を進める。	○教科の本質を踏まえて、教材の精選を進め、指導の効率化を図る指導計画を作成する。 ○自校の実態に即した合科的指導による効果的な指導計画を作成する。
課題 3 子供一人一人の認識を深め、個人差に応じた同内容指導計画を作成する。	○児童生徒の発達段階に即応しながらも、学習の系統性を踏まえた同単元指導計画を作成する。

学習指導（指導方法・様式）の最適化	
目標 「子供一人一人が、自ら学ぶ態度・能力を身に付け、ともに高まっていく授業の創造	
課題 1 問題意識をもち、自ら解決し、集団で高め合っていく授業のあり方を究明する。	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人の学習意欲を高め、自主性の促進を図り、自ら解決する学習のあり方を工夫する。 ○学習目的に応じて同内容、類似内容を積極的に取り入れ、子供を生かした学習の個別化、集団化を図る学習形態を構築する。
課題 2 子供一人一人の思考過程を踏まえたを指導方法を探究し、充実した指導様式を確立する。	<ul style="list-style-type: none"> ○言語表現力、思考力を育て子供が変容する学習過程を作成する。 ○異内容指導による複線型過程の充実と、直接指導・間接指導の効率化を図る。 ○小規模校における学習の評価のあり方を究明する。
課題 3 教科の本質に立ち、教材の価値を踏まえ、一人一人にわかる授業を創造する。	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人がわかり、生き生きとした授業を展開するために、授業目標を明確にし、授業過程の最適化を図り、評価のあり方を究明する。 ○学力を向上させ、複式指導の効率を高める学習教材（資料）を改善・充実する。

研究の成果と課題

学校・学級経営の現代化	
課題 1 子供一人一人を生かす経営理念と教育計画の樹立	<p>へき地・小規模・複式学校では、その特性を十分に生かし、子供一人一人の的確な実態把握、基礎的的事項の精選の進め方、主体性・創造性を育てる指導のあり方、教育課程の改善など、学校・学級経営の構造を明確にし、実践を進めている。</p> <p>総合的な学習や創造的な学習活動を取り入れ、子供一人一人の能力や適性に即した指導方法の工夫・改善、協力教授組織などにより、全校的な学習、集合学習など、社会性や協調性の育成をねらいとした教育活動で成果を上げている。</p>
課題 2 父母及び地域の人々とともに歩む教育活動の推進	<p>へき地・小規模・複式学校では、地域の教育力を見直し、学校・家庭・地域相互の教育機能を認識し、長期的展望にたった経営の推進をしている。</p> <p>また、地域の特色を明らかにし地域素材を教材化した教育課程の編成・実施、地域父母・行政と一体となった全村教育、勤労体験学習の組織化、及び道徳と特別活動の関連など具体的な計画を立てて実践している。</p>
課題 3 郷土の自然と調和し、文化や伝統を尊重した個性豊かな学校・学級経営の樹立	<p>へき地・小規模・複式学校では、学校の教育目標の具現化を目指して、地域素材を生かし、子供の心情を育てる教育活動を推進している学校が増えてきている。動植物の飼育栽培により生命に対する感動も豊かになり効果を上げている。</p> <p>地域の産業と結び付いた勤労体験学習も父母との連携の中で進められている。また、地域の環境を生かし、子供の実態に即した全校的な体力づくりを実施し効果を上げている。</p>
課題 4 学校教育活動の充実	<p>へき地・小規模・複式学校では、教師の指導力を高め、共同研究体制を充実し、地域が求めている課題を関係学校が目標を同一にして取り組</p>

と、近隣地区との教育の協業化体制の確立	み、教育効果を高めている。集合学習、交流学習などにおいて協業化を進める とともに、学校・学級経営の評価活動を通し、その改善充実を図っている。
今後の課題	<p>へき地・小規模・複式学校では、子供一人一人に目を向け、子供が伸びる可能性を信じ、21世紀にたくましく生き抜く意志と実践力の育成に向けて、経営理念と教育計画を明確に樹立することが大切である。</p> <p>その中で、自己教育力を育てる教育課程の編成・実施・評価の研究、国際協調の基盤となる「思いやりの心」を育てる学校・学級経営、地域の教育力生かした特色ある学校経営などの推進に当たっては、内容の精選、年度別重点目標などを整理する必要がある。</p>
学習指導（指導計画）の最適化	
課題1 自校の実態や小規模学校の特性を生かした指導計画の作成	<p>複式の学校では、少人数の複式学級の増加に伴い同単元指導計画をはじめ、学年別指導計画の作成が進められ、より望ましい指導のあり方が追究された。</p> <p>同単元指導計画の作成では、それぞれの教科の特質や子供の実態を踏まえ、共通指導場面を設定しやすい教材と設定しにくい教材を明らかにした。とりわけ、同内容指導は、指導計画作成に際しての困難点があるとはいえ、共通なねらいで指導するため、集中して能率的に学習を進めることができることを数々の実践が実証した。</p>
課題2 教材の精選を進め、複式教育による学習の効率化と学力向上を目指した指導計画の作成	<p>複式指導では、教科の本質を踏まえ、単元の目標や系統を明らかにした中で、指導の効率化を図る教材の精選及びその指導計画の作成を重視した実践がなされた。</p> <p>また、上・下学年の共通のねらいや、教材解釈を的確に行い、子供の興味や関心を生かした学習課題の設定により、子供が主体的に取り組む同単元指導計画が推進された。</p> <p>更に、地域性を生かして、地域素材の活用を目指す指導計画の作成も各地で立てられ、その実践での成果を上げている。</p>
課題3 子供一人一人の認識を深め、個人差に応じた同内容指導計画を作成する。	<p>同単元指導においては、学年差・個人差に応ずる指導を重要な観点とし、子供一人一人の能力を十分に考慮しながら指導内容・発達段階・学習経験を踏まえ、教科の系統性・順次性を尊重する指導計画を作成するようになった。</p> <p>学年差・個人差を十分に配慮した（特に下学年への配慮）徹底した指導は、子供の学習に対する興味・関心や教科の系統性を踏まえた授業を創造するとともに、「形成的評価」を媒介にして、多様な教育方法を有機的に結合させる中で、子供一人一人の認識を深め、個に応じた指導が展開されるようになった。</p>
今後の課題	<p>へき地・小規模・複式学校の学習指導では、能力差・個人差に応じた指導計画をより重視し、目標・学習の仕方・学習意欲などの視点から、子供一人一人をどうとらえ、生き生きとした学習をどう成立させるか、指導計画の改善を更に進め、よりきめ細かな指導計画が大切である。</p> <p>合科指導による指導計画は、これまで具体的に提示されなかった。今後、この面での取り組みを先進校に学びながら進めていく必要がある。</p> <p>指導計画の客観的な評価方法について、多くの実践がなされているが、更に実践を通しての検証を行い、子供の成長と変容をとらえ、評価の方法論の確立を望みたい。</p>

学習指導（指導方法・様式）の最適化	
<p>課題 1 問題意識をもち、自ら解決し、集団で高め合っていく授業のあり方の究明</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、課題解決型の学習を目指した学習組織・技能習得の研究が深められ、子供自身に課題を発見させるため、地域素材を教材に組み入れる実践が増えてきた。また、子供のコミュニケーションを重視した、問題意識を高めるための思考の深化が図られた。</p> <p>更に、複式学級における同内容指導・類似内容指導を取り入れ、共通指導場面を設定する実践や、「個を生かす」ための学習の個別化・集団化に目を向けた実践が増えてきた。</p>
<p>課題 2 子供一人一人の思考過程を踏まえた指導方法を探究し、充実した指導様式を確立する。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、子供が変容する学習過程の作成において、4段階指導過程を基本とした課題解決型学習過程の研究が深められ、学年別指導にも共通指導場面を設定する実践が増えてきた。</p> <p>自主学习、協力学習のあり方をめぐる研究が深まり、間接指導の効率化が図られた。</p> <p>学習評価では、主体的な追究を促す自己評価や相互評価を取り入れた実践が増え、到達度評価を取り入れた学習評価のあり方を探る実践も増えてきた。</p>
<p>課題 3 教科の本質に立ち、教材の価値を踏まえ、一人一人にわかる授業を創造する。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、授業目標の明確化、授業過程の最適化、評価のあり方においては、同内容指導における共通目標、学年目標の設定（行動目標化）具体化が究明され、同内容指導においても学習評価と目標設定とのかかわりについての研究が深められた。</p> <p>複式指導の効率を高める学習教材（資料等）の改善・充実について、指導過程の中に個別学習機器の利用を位置づけた研究実践がなされ、さらに、コンピュータの利用による間接指導の「直接化」を目指す実践もなされた。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、複式指導の複雑さから過去の研究内容が方法論に偏りがちであるという指摘もあり、本来的な学習指導のあり方について深い教材解釈に立脚し、研究の方向性を明示する時期であり、教科の本質に立って究明していく必要がある。</p> <p>学習の個別化は、少人数という特性から最も注目される方向であるが、同時に集団化による個の高まりに期待する教育効果も忘れてはならない側面である。この両面から「個を生かす」方法をさらに究明していく必要がある。</p> <p>複式指導における評価のあり方については、少人数という特性から、評価に関しては弱点として指摘されている。石狩大会あたりから意識的な実践が試みられているが、まだ充分とはいえない。形成的評価の考え方を取り入れた実践的な評価の研究が待たれる。</p>

(4) 第4次長期4か年研究推進計画 平成2(1990)年度～平成5(1993)年度

研究主題

「郷土を愛し、たくましい実践力をもって、主体的・創造的に生きる心豊かな子供の育成」
～へき地・小規模・複式学校の特性を生かし、

児童生徒一人一人を伸ばす学校・学級経営と学習指導の充実・発展をめざして～

成果の充実・発展をめざして

へき地・小規模・複式学校の児童生徒にとって、重要度・緊急度・必要度の高い課題として、先に「心の豊かさ」と「たくましさ」「主体性・創造性」、更に「国際性」の育成を挙げた。このことを踏まえた上で、道復連の第3次長計の研究主題を受けて、上記のような研究主題を設定した。第1次から第3次に及ぶ20年間の実践的研究の成果を正しく継承し、発展させていきたい。

そのためには、これまでに公開された研究内容（授業実践と、その背景となった理論）を集約・整理し、更にその上立って実践的研究を進めていくことが肝要である。成果と課題を明らかにし、それらの充実と問題解決を図り、交流を通して研究・実践が深められるようにしたい。

これまでの実践的研究については、「方法論」に重点が置かれていたきらいがあったので、今後は、「教科の本質」にも視点を当て、より一層の充実を図るようにしたい。また、研究・実践の検証は、評価によって確立されるものであるから、評価のねらい・内容・観点などを明確にし、日常観察によるものと合わせて、より客観的・合理的に検証していくことを重視したい。

長期・課題別・共同研究方式は、この20年間、第1次～第3次長計の推進によって確立され、関係諸機関から高く評価されている。これまで各地に散在・孤立していた道内の優れた研究・実践を集約し練り上げて、へき地・小規模・複式学校の実践理論や、教育方法、指導計画、研究方法、実践過程などのモデルを作ってきた。今後は、これらについて全面的な継承と充実・発展を目指して一層の努力を重ねていきたい。

第4次長計の策定に当たっては、広く会員の意見を求め、へき地・小規模・複式学校の子供たちにとって必要なことは何か、そのために教師がなすべきことは何かを見据え、これまでの研究方法や内容に検討を加えた。その結果、そのまま継承していったよいものと、改良すべきものが生じたので、それらを整理して研究課題を策定した。

また、第4次長計については、学校の置かれている今日的な状況と、社会情勢の進展の方向と早さを考慮し、全へき連の研究の歩みと足並みを揃えるために、長期4か年計画という研究機関を設定した。

北海道へき地・複式教育研究連盟

平成5(1993)年度、北海道複式教育研究連盟(道復連)は、北海道へき地・複式教育研究連盟(以後「道へき・複連」)と改称した。

道へき・複連は、教育研究を本分とする組織団体であり、へき地・小規模・複式学校が抱える諸問題についても、総合的に解明・解決するための諸施策を打ち出し、へき地・複式教育の改善・充実に努めている。

したがって、道へき・複連は、教育研究の充実を図るため研究推進委員会を組織し、へき地・複式教育の特性を考慮しながら「研究推進」と「条件整備運動」を両立させ、教育理想を追求するという基本姿勢をもつ。

研究の経過

第1期(実践研究の検証期) 平成2(1990)年度～平成3(1991)年度

これまでの研究推進計画の総括に基づく研究内容、方法等の成果を再確認し、第4次長計の研究領域の課題について、より確かな理論の確立と実践による検証をしていく時期である。

第2期（実践研究の整理期） 平成4（1992）年度～平成5（1993）年度

複式教育の実践論、方法論の整理・集大成を図り、第5次長計の策定を行う時期である。
また、第4次長計に、次のような特徴的課題をもたせる。

- ① 一人一人の児童生徒に、学習の基礎的・基本的内容と豊かな人間性を身に付けさせ、激動する社会を自らの力で、たくましく生き抜く意志と実践力を付けさせる。
- ② へき地・小規模・複式学校の特性に立った学校・学級経営や学習指導を充実・発展させる。
- ③ 地域の自然や文化、歴史などに目を向けさせ、地域の教育力を活用して、地域に根ざした教育活動を展開する。
- ④ へき地・小規模・複式学校の児童生徒のもつ課題としてあげられている言語能力、表現力、社会性、感受性、感動性などの劣性を克服する。
- ⑤ 国際化へと動きつつある現在、深く国際理解し、国際感覚豊かな人間を育成する。そのための第1段階として、郷土を愛する児童生徒を育成する。

研究課題と研究内容

学校・学級経営の深化・充実	
目標 「地域の教育課題を踏まえ、地域・父母とともに、子供一人一人を生かす経営の創造」	
課題1 子供一人一人を生かす経営理念と教育計画の改善・充実に努める。	○子供一人一人を生かす教育目標達成のための経営構造の計画化を図る。 ○へき地・小規模・複式学校の特性を生かし、地域に根ざした一人一人を生かすための教育計画を構想し実践する。 ・教育課程の編成・実施・評価・改善の研究 ・オープンシステム、全校集会活動、合同学習
課題2 父母及び地域の人々とともに歩む教育活動を推進する。	○地域との連携を図り、豊かな教育環境を設営し、充実した経営を進める。 ・表現力を伸ばし情操を豊かにする全校音楽・創作活動 ○市町村教育目標達成のための教育計画の策定と実践を進める。 ・全村教育、体験学習、ふるさと学習、山村留学制度など
課題3 郷土の自然・文化・伝統を尊重した個性及び国際性豊かな学校・学級経営を樹立する。	○基本的行動様式の徹底や道徳的实践力の育成を重視した道徳教育の指導計画の改善・充実に努める。 ・郷土理解、自国の文化・伝統の尊重、思いやりの心情 ○体験的な学習を通して自主性や連帯意識を高める特別活動の指導計画の改善・充実に努める。
課題4 学校教育活動を充実し、近隣地区の教育の協業化体制を確立する。	○評価活動を通じた学校・学級経営の活性化を図る。 ・評価項目・評価視点を明確にした個に応じた評価の研究 ○地域や学校の実態に即した集合学習、交流学习などの協業化を進める。 ・近隣校との共同教育活動、集合学習における協力体制の構築 ○学校の実態に即した校内研修の充実と近隣校との協業化による共同研究の推進を図る。 ・焦点化した校内研修、共通の課題意識に支えられた共同研究

学習指導の最適化	
目標 「子供一人一人が、自ら学ぶ態度・能力を身に付け、共に高まっていく授業の創造」	
課題 1 へき地・小規模・複式学校の特性を生かし、子供一人一人を生かす学習指導計画の作成と改善に努める。	○教科の本質を踏まえて教材の精選を進め、指導の効率化を図る指導計画の作成・充実を進める。 <ul style="list-style-type: none"> ・教科の目標・系統・指導目標・指導内容の明確化 ・基礎的基本的事項の精選、学習の適時性の考慮 ・地域素材の教材化 ・自校の実態に即した合科的指導の展開 ○各教科の特質や子供の実態に即した効果的な単元指導及び直接指導・間接指導の工夫・改善を図る。
課題 2 問題意識をもち、自ら解決し、集団で高め合っていく授業のあり方を究明する。	○一人一人の学習意欲を高め、自主性の促進を図り、自ら解決する学習のあり方を工夫する。 <ul style="list-style-type: none"> ・学習のねらいを把握し、自ら課題を解決していく力の育成 ・子供自身による課題発見、学習計画作成、仮説設定、解決方法の工夫、資料選択などの学習技能の育成 ○学習目的に応じて同内容、類似内容を積極的に取り入れ、子供を生かした学習の個別化、集団化を図る学習形態を構築する。 <ul style="list-style-type: none"> ・学習過程、学習形態、学習形態の工夫
課題 3 子供一人一人の思考過程を踏まえた指導方法を探究し、効果的な評価のあり方を工夫する。	○子供一人一人の感じ方、考え方、表し方などを豊かにする学習過程を工夫・改善する。 <ul style="list-style-type: none"> ・教師の発問（助言、承認、評価的発言） ・コミュニケーション、ノート利用指導 ○学年別指導による複線型過程の充実と、直接指導・間接指導の効率化を図る。 <ul style="list-style-type: none"> ・「わたり」と「ずらし」 ○小規模校における学習の評価のあり方を究明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・少人数学級における効果的な評価方法 ・複式学級におけるペーパーテストに偏らない絶対評価
課題 4 教科の本質に立ち、教材の価値を踏まえ、一人一人にわかる授業を創造する。	○一人一人がわかり、生き生きとした授業を展開するために、授業目標を明確にし、授業過程の最適化を図り、評価のあり方を究明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・授業目標の明確化と授業過程の最適化 ・教材の精選と重点化が生きる授業 ○学習意欲や学習技能を高める視聴覚教材・教具などの工夫・改善に努める。 <ul style="list-style-type: none"> ・録音教材、手引き、ワークシート等の開発・作成・活用 ・C A I の活用と授業の効率化

研究の成果と課題

学校・学級経営の深化・充実	
<p>課題 1 子供一人一人を生かす経営理念と教育計画の改善・充実に努める。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、その特性を十分に生かし、子供一人一人の的確な実態把握、基礎的的事項の精選の進め方、一人一人に配慮し、生かす指導計画の作成、主体性・創造性を育てる指導のあり方、新学習指導要領の趣旨を踏まえた教育課程の編成・改善など、学校・学級経営の構造を明確にし、実践を通して検証してきている。</p> <p>特に、学校や地域の特性を生かした総合的な学習や、体験学習を多く取り入れ、創意と工夫に満ちた教育計画の樹立を図り、子供一人一人の役割が明確で生き生きと活動することにより、社会性や協調性が育ってきている。</p> <p>道徳教育や特別活動の全体計画・年間指導計画の作成により、ゆとりある充実した教育活動を展開し、豊かな人間性の育成が図られている。</p>
<p>課題 2 父母及び地域の人々とともに歩む教育活動を推進する。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、学校・家庭・地域相互の教育機能を認識し、長期的展望に立ち、連携を深め、児童に経営の推進をしてきている。</p> <p>また、地域の特色を明らかにし、地域素材を教材化した教育課程の編成・実施、地域父母・行政と一体となった全村教育、勤労体験学習の組織化、及び道徳と特別活動の関連など具体的な計画を立てて実践してきている。</p>
<p>課題 3 郷土の自然・文化・伝統を尊重した個性及び国際性豊かな学校・学級経営を樹立する。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、学校の教育目標の具現化を目指して、地域の素材を活用し、子供の心を育てる教育活動を推進している。</p> <p>特に、郷土の歴史・産業・生活などの学習を通して、地域への理解を深め、思考力・表現力・創造力などの伸長を図るとともに、郷土を愛する心を育てている。</p>
<p>課題 4 学校教育活動を充実し、近隣地区の教育の協業化体制を確立する。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、教師の指導力を高め、共同研究体制を充実し、地域が求めている課題を関係学校が目標を同一にして取り組み、教育効果を高めている。集合学習、交流学習などにおいて協業化を進めるとともに、学校・学級経営の評価活動を通し、その改善充実に努めている。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>教育改革の進展に伴う教育課程の改善など、さまざまな教育課題に対して、へき地・小規模・複式学校では、すでに実践しているように「へき地・複式教育に教育の原点あり」という認識を一層深める中で、共同研究体制をより強化し、さらに発展させていくことが必要である。</p> <p>子供一人一人を生かす学校・学級経営、創意を生かした指導計画の改善・充実、地域素材の教材化に努めることが必要である。また、家庭・地域との連携を深め、地域の教育力の効果的な活用を図っていくことが必要である。</p> <p>近隣校との連携を強化し、指導面・運営面・行政面すべてが統合された集合学習の在り方を研究していく必要がある。</p> <p>学校や地域の特性を生かした学級活動・道徳の全体計画及び年間指導計画の改善・充実が必要である。</p>

学習指導（指導計画）の最適化	
<p>課題 1 へき地・小規模・複式学校の特性を生かし、子供一人一人を生かす学習指導計画の作成と改善に努める。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、学校の実態や学習環境を考慮して、学年別指導計画・同単元同内容指導計画・類似内容指導計画の作成が進められ、指導の困難点を克服し、より望ましい指導のあり方が追究されてきた。</p> <p>特に、へき地・小規模・複式形態という三特性を踏まえ、地域の素材を教育課程に位置づけて児童生徒の興味・関心を高めるとともに、地域や子どもの実態に即し、創意に満ちた生活科などの授業が展開されている。</p>
<p>課題 2 問題意識をもち、自ら解決し、集団で高め合っていく授業のあり方を究明する。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、四段階指導過程を基本とする問題解決型の学習を目指した学習組織・技能習得の研究が深められてきた。</p> <p>同単元同内容指導や類似内容指導において、直接指導の場面を増やすことにより、一人一人に目を向けて指導の充実を図ることができた。また、多人数による思考の深まりと学級としての一体感を生かすことによる学習意欲の高まりが見られた。</p> <p>異内容指導において、同時展開過程を導入し、学習課題を明確化した授業を展開することにより、問題意識が学習課題意識へと発展・転化するなど、意欲的な学習指導の展開が見られた。</p>
<p>課題 3 子供一人一人の思考過程を踏まえた指導方法を探究し、充実した指導様式を確立する。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、四段階指導過程を基本とした問題解決型の学習過程を通して、「学習の進め方」を理解させることにより、児童生徒が自力で学習課題を把握し課題解決する力を身に付けさせてきている。</p> <p>特に、課題意識を高めるために、低学年のうちから「学習課題づくり」に取り組ませ、課題に対して自分の考えをまとめる「一人学習」や思考を深める「グループでの練り合い」を学習過程に位置づけることによって、自己学習力の育成が図られている。</p> <p>児童の思いやこだわりを重視した活動や体験の深まりを大切に生活科の活動案の様式化を図ることにより、児童の活動が生き生きとしたものになっている。</p>
<p>課題 4 教科の本質に立ち、教材の価値を踏まえ、一人一人にわかる授業を創造する。</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、複式指導という困難さを抱えながら、少人数という利点を生かし、児童生徒の学習状況やつまづきを的確にとらえ、その場で個々に対応して指導するなど、児童生徒一人一人に「わかる授業」の展開に努めてきた。</p> <p>特に、教科の本質や教材の特質を踏まえ、教材を分析し、教材の構造図や目標分析表を作成するとともに、指導過程や学習形態の明確化を図ること、学習の手立てを明らかにすることにより学習意欲の喚起、思考力・発表力などの向上、学び方の育成が図られている。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>へき地・小規模・複式学校では、その三特性を劣性としてではなく、教育の活性化を図る利点として生かし、教育活動の一層の充実を図ることが大きな課題である。</p> <p>これからは、複式の指導様式・指導方法のみならず、教科の本質に立った本来的な学習指導のあり方を究明するとともに、学習の個別化・集団化による、個を生かす指導過程や学習形態の工夫が大切である。この面での取り組みを先進校に学びながら進めていく必要がある。</p> <p>地域や学校の実態、児童生徒の実態に即した指導計画の作成を図るとともに、課題解決的な学習や体験的な学習を取り入れるなど、新しい学力観に対応した授業の創造を図り、自ら学ぶ意欲の育成や主体的な学習の仕方を身に付けさせる必要がある。</p> <p>評価の観点を明確にし、指導過程に評価を位置づけること、自己評価や相互評価を取り入れることなど、評価活動の改善・充実を図ることが課題である。</p>